

近代別荘の普及に見る鎌倉の都市構造

The Effect of the Spread of the Modern Villa on the Urban Structure of Kamakura

住居学科 片山 伸也

Dept. of Housing and Architecture Shinya Katayama

抄 録 明治期の鎌倉には、ドイツ人医師バルツが保養のための避暑・海水浴に最適の地と紹介して以来、多くの別荘が建設された。本研究では、明治45年の別荘一覧に収録された別荘の所在地と所有者の身分・職業を分析することで別荘の分布傾向を明らかにするとともに、異なる時期に作成された4つの地図に描かれた市街地の拡張過程から鎌倉の住宅地化がどのように進化したかを考察した。初期に建てられた別荘の多くは華族による保養・療養のための別荘で、多くは海岸に近い既存集落（長谷・坂ノ下・材木座）に建設された。また、明治30年代に増えた海軍関係者の別荘の多くは常住目的のものであったため、海から離れた駅に近い内陸部に多く建設されたが、やはり既存市街地（雪ノ下・小町）の拡張を促した。その中で、華族を中心に海岸に建設された別荘は、中世以来都市化されることがなかった都市南部の開発を促し、都市構造の変化をもたらしたことがわかった。

キーワード：鎌倉、明治時代、別荘、華族、海軍住宅

Abstract During the Meiji period, many villas were built in Kamakura, after the German doctor Erwin von Bälz recommended the town as an ideal place for summering and sea-bathing. In this study, I establish the villas' distribution tendency from the 1912 records of the villas' location and their owners' status and occupation. I also use city maps to examine the process of urbanization. Many of the early aristocrats' villas were built in existing residential areas near the seashore. In the later years of the Meiji era, the construction near the station of increasing numbers of Naval principal residences expanded existing residential areas. At the same time, the development of aristocratic villas on the seashore extended and modernized the Southern district for the first time since the medieval period.

Keywords : Kamakura, Meiji period, villa, aristocracy, naval housing

1. はじめに

関東平野の南端に位置し相模湾に面する鎌倉は、三方を山に囲まれ、一方は海に面した天然の要害で、源頼朝が幕府を開いた地として知られる。足利尊氏が京都に幕府を遷して後は都市としての重要性を失うことになるが、江戸期の商人文化の隆盛と物見遊山の流行から近隣の江の島が行楽地として賑わうと、鎌倉も長谷の大仏などへの参拝者が増え行楽地としてある程度の賑わいを見せた。

中世鎌倉の都市計画については、若宮大路を朱雀大路と見立てて条里制的な道路計画を見出そうとす

るなど様々な推論が試みられてきた¹⁾。しかし、近代鎌倉については歴史建築単体の研究が谷戸などの自然地形に由来する都市景観の研究が先行し、都市としての全体像が再構築されることはこれまでなかった。

本研究は、明治以降の鎌倉が首都東京の近郊住宅地として着目され宅地化していく過程の中で、鎌倉の都市構造がどのように変化したのかを明らかにすることを目的としている。特に本稿では、明治期中葉にはじまる政財界要人による別荘建設が鎌倉においてどのように流布したのか、またその別荘の実態と分布によって中世都市鎌倉の都市構造がどのよう

に変化し近代鎌倉のイメージが確立したのかを考察する。

2. 明治以前の鎌倉

■鎌倉の地形と中世鎌倉の都市空間

源頼朝の開幕時における鎌倉の地形についての「三方を山に囲まれた要害の地」という一般的な認識は、地の利を強調するあまりいささか単純化され過ぎていえる。平野部最奥の高台に位置する鶴岡八幡宮を起点として伸びる若宮大路を軸として御家人の屋敷が展開するが、平野部は狭く、山間に深く入り込んだ谷戸と呼ばれる狭小な谷あいには社寺集落が点在していた。また、現在の江ノ電の由比ヶ浜駅から和田塚駅を経て若宮大路の一の鳥居に至る南西部一帯は砂丘をなしており、これを貫通して海へ注ぐ滑川は、遠浅の海岸特有の波浪による河口閉塞により、しばしば平野部を冠水させたりしい²⁾。

貞永元年(1232)には往阿弥陀佛の提言で和賀江の築港がなされ、鎌倉の港湾機能は整備された。13世紀後半までには由比の浜辺一帯には地下倉が数多く設置されたことが発掘の結果わかっている。また、浜の住人には渡来の材料を加工する職能民が多く、加工の際に出る屑は工房の周囲に捨てられたようで、浜には都市中心部から排出されたゴミも投棄されたりしい。都市住民の遺体遺棄も行なわれた。鎌倉には丘陵を掘削した「やぐら」と呼ばれる岩窟墓が無数にあるが、その被葬者は武士・僧侶階級に限られ、一般の都市住民の埋葬は浜地であつたらしく、由比ヶ浜一帯からは多く人骨が発掘されている。中には「遊離人骨」とよばれる部分骨の出土や牛馬骨が混ざっている場合もあり、埋葬されたものの打ち棄てられたものが混然としていたらしい³⁾。鎌倉の南は海に面した開放的な都市空間を想起しがちだが、南西の砂丘に地下倉が建ち並ぶ先はどちらかと言うと人々から忌避された死の世界となっていたのである。

中世期の鎌倉は、三方を物理的に山で囲まれ南には荒涼とした砂浜が迫る極めて限られた空間的広がりの中で、若宮大路を枢軸とした武家地から谷戸に入り込んだ社寺集落まで市街地が稠密に連続する高密度都市だったと言える。

■近世の鎌倉

近世の鎌倉については、鎌倉時代や室町時代ほど

には知られていない。元和2年(1616年)に鎌倉を訪れた平戸のイギリス商館長リチャード・コックスの記録によると、当時の鎌倉は荒廃し谷間のこかしこに家が散在する全くの農村集落であつたらしい。コックスのような外人の宿泊する宿はなく、彼は東海道に沿った藤沢に泊まっている⁴⁾。しかし、江戸中期には近隣の江ノ島弁財天や金沢八景と共に江戸に近い遊歴の地となり鎌倉の社寺巡礼も増え、門前町としての性格を帯びた集落が形成された。鎌倉の主な門前町としては、八幡宮の若宮大路を中心とした雪ノ下村、長谷寺を中心とした長谷村、建長寺や円覚寺を中心とした山ノ内村、光明寺を中心とした材木座村が挙げられる。

3. 近代鎌倉の別荘地化

明治期に入って鎌倉が都市として発展する契機となったのは、明治22年6月11日の横須賀線の開通であった。しかし、別荘地としての鎌倉が見出されたのはそれよりも10年ほど早い明治12年のことである。東京大学医学部に招聘されていたドイツ人医師エルウィン・ベルツは横浜から馬車で江ノ島を訪れているが、その目的は海水浴場に適した場所を探すため、江ノ島自体は岩が多く不適だが七里ヶ浜の一帯がこれに適していることを日記に記している⁵⁾。ベルツは病気にかからないための保養の重要性を説き、主治医を務めていた伊藤博文や大隈重信、当時の皇太子などに湘南の各地に別荘を建てることを勧めた。明治19年には鎌倉由比ヶ浜に結核の療養を目的とした鎌倉海浜院が開設され、以後湘南地区には複数のサナトリウムが開設されている。海水浴も医師によって当初は医療・療養目的で導入され、砂丘地帯には防風や防砂のための植林が行われ海岸線も整備された。明治20年に東海道線の横浜-国府津間が開通すると、湘南は東京から汽車で2時間程の交通至便の地となり、東京・横浜に常住する上流階級の別荘地として人気を博した。

明治20年12月10日の毎日新聞は、「井上伯には相州鎌倉郡由比ヶ浜と七里ヶ浜の間にて海面に突き出せる宇金山へ、別業新築に着手したるが、来年三月までには落成すへしと云う」と井上馨伯爵(当時外務大臣)の別荘建設の模様を伝えている⁶⁾。その他に「井上・山田の両大臣より吉田・楠木・三浦・西の両議官、芳川次官・有島横濱税関長・柳谷謙太郎氏、其他華族・官吏・外国人等数名の別荘

あり⁷⁾と、当時の鎌倉における政財界要人の別荘ブームを伝えている。

別荘地としての鎌倉が目されたもう一つのきっかけは、明治22年の横須賀線（大船-横須賀）の開通であった。鉄道開通後の23年には長谷寺谷に前田公爵家が別荘をつくり、26年には笹目ヶ谷に星野天知が別荘をつくっている⁸⁾。

明治27年7月7日、横須賀線を挟んで二分されていた東鎌倉村（旧峠、十二所、浄明寺、二階堂、西御門、雪ノ下、扇ヶ谷、大町、小町の各村）と西鎌倉村（旧乱橋材木座、長谷、坂ノ下、極楽寺の各村）が合併して鎌倉町ができるが、その後の明治30年から明治45年までの鎌倉町の戸数と人口の変化を見ると、戸数が1,130戸から1,650戸、人口は7,210から10,974へと増えている。『鎌倉議会史』の資料によると、明治36年の別荘の戸数は270戸で総戸数1214戸の22.2%を占めている。それが明治40年には27.4%、大正元年に至って480戸29.1%に及んでいる⁹⁾（表1）。

表1 鎌倉の別荘戸数

年	別荘戸数	同人口	総戸数	総人口
明治36年	270	2,164	1,214	8,376
37年	295	2,360	1,240	8,867
38年	320	2,240	1,260	9,267
39年	330	2,200	1,312	9,642
40年	385	2,535	1,400	9,754
41年	400	2,805	1,460	10,140
42年	425	3,435	1,514	10,473
43年	443	3,544	1,560	10,505
44年	461	3,327	1,620	10,907
大正元年	480	3,360	1,650	10,974

（『鎌倉議会史』による）

4. 近代「別荘」建築の分布

避暑・保養地としての鎌倉の賑わいを明治45年発行の『現在の鎌倉』は次のように記している。

「毎年七月中旬か又は八月上旬頃より、九月の下旬頃迄決まりの様に、必ず此地に来て別荘或いは貸別荘又は貸間に避暑する人が多い、これらの人を別荘客、避暑客と伝ふて、鎌倉土着の諸商人貸家業者は大いに崇拝するのだ」、[此次駅は鎌倉

駅だと騒がしく甲から乙へ乙から丙へと伝言する遊覧団員もある、フロックコート山高帽子の紳士白髪銀髯の元老も、盛装を凝らした新婚旅行の若夫婦もある、赭顔厳しき海陸の軍人もある、客車内は百人千種の話しにかまびすしい、間もなく列車は轟々とトンネル内に入った、(中略)列車は絹を劈ひた様な汽笛を幾回となく鳴らしてトンネルを出ると漸次に徐行して鎌倉駅構内に停車した、数百の遊覧団体、一日の日曜を利用した個々の遊覧客、一家族を引き連れた避暑客等、数へ切れぬ多くの下車客が潮の如く押しつ押しされつ改札口から出た¹⁰⁾。

かように別荘地としての活況を呈していた鎌倉であるが、その「別荘」の概念は今日のものとは多少異なるため注意を要する。別荘とは本邸があつての別邸のことであり、本邸が日常的な場とすると別荘は非日常的な場となる。しかし、鎌倉では「常住の別荘」という表現が度々見られ、社会的な建前上の本邸・別荘の区別と生活実態は異なっていた可能性もある。鎌倉では明治以降新しく移入してきた人々を押しなべて別荘族と呼んでいたらしく、大正になって定住目的で移り住む人も多くなったが、彼らの住居も「お別荘」と呼ばれた¹¹⁾。

『現在の鎌倉』巻末資料「別荘一覧」には「此地に常住又は臨時に居住する一定の別荘者」として582件の別荘所有者の氏名、別荘所在地、本宅住所、身分・職業を列挙している。字・地名ごとに集計すると表2のようになる¹²⁾。

鎌倉の別荘所有者の中に、横須賀港を基地とする海軍軍人たちがいたが、別荘一覧に掲載された文武官144人中、軍人・技師など海軍関係者は70名に上る¹³⁾。日清戦争とその後の三国干渉をきっかけに海軍が拡張され、それに伴って軍港である横須賀の重要性が高まり所属する軍人の数も増加した。横須賀線を利用すると通勤圏である逗子や鎌倉方面に居を求めようになり、鎌倉にも伊東祐亨、伊集院五郎、上村彦之丞ら大将以上の高位軍人が居を構えた。地域別に見ると、小町と扇ヶ谷の海軍関係者数が突出して多く、文武官に対する割合で見ても鎌倉全体が131件中68件の51.9%であるのに対して、小町は81.8%、扇ヶ谷が73.7%となっている。また、絶対数は決して多くないが雪ノ下は7件全てが海軍関係者であり、いずれも海軍町の様相を呈している。

表2 鎌倉の別荘所在地内訳 (明治45年現在)

字・地名	皇族	華族	文武官	海軍 関係 (内数)	銀行・ 会社員	その他	小計
材木座	1	9	21	6	12	37	80
小町		1	33	27	10	21	65
長谷	1	12	10	3	13	21	57
扇ヶ谷		5	19	14	4	3	31
大町		4	12	7	9	5	30
由比ヶ浜	1	5	1	1		18	25
極楽寺		4	2		4	15	25
坂ノ下		4	9		5	7	25
海岸通り		3	3		3	14	23
雪ノ下		1	7	7	3	7	18
笹目			1		2	9	12
佐助			3		1	6	10
二階堂			4	2		2	6
西御門		1	2	1	2		5
名越		1	2	1		1	4
和田塚						4	4
一の鳥居		2			1		3
上原						3	3
その他	1		2	1	1	2	6
七里ヶ浜						3	3
腰越・津		4	3		3	17	27
片瀬		7	3		6	24	40
鶴沼		4	7	2	16	53	80

(『現在の鎌倉』別荘一覧による)

※七里ヶ浜・腰越・津・片瀬・鶴沼は当時鎌倉郡だったため一覧に掲載されているが、鎌倉町外のため本論の考察対象からは除外した。

海軍関係者70名の内、関東以遠に本住所を持つものは43名を数える。さして階級の低いこれらのもの¹⁴⁾が地方で軍務に就き、鎌倉に「別荘」を所有していたとは考えにくい。いわゆる本籍に相当するものを出身地に残したまま、実質的には鎌倉に常住し横須賀で軍務に当たっていたと考えるのが妥当であろう。東京に本住所を持つものも多く、東京-横須賀間の当時の通勤時間を考えると、同様に鎌倉に常住していたと考えるのが自然と思われる。横須賀以外にも逗子池子の海軍弾薬庫、深沢の海軍工廠、横浜は戸塚原宿の戸塚海軍病院、小菅ヶ谷の第一海軍燃料廠など鎌倉周辺には海軍施設が多く分布しており、海軍関係者が鎌倉に住拠点を置く合理性は十分に高かったと言える。

一方で華族の別荘が多く見られるのが、材木座と長谷である。小町と共に別荘の多い3地域であるが、長谷は別荘総数に対する華族の割合も21.1%と

高い。華族の別荘52件所有者51名中、本住所が地方の者が3名(盛岡・鹿児島・宮崎)、常住の者が2名あり、その他の50名はいずれも東京に本住所を有している。長谷には島津忠重(公爵)が、坂ノ下には大村純雄(伯爵)らの別荘が建てられ、比較的早い時期から華族による別荘建設が進んでいた。鎌倉の当初の別荘は、先述の通りベルツの勧めを受けた政財界の要人らによって海水浴を含む保養・療養を目的として海浜部に多く建てられたと考えられる。

鎌倉町における別荘の分布を見ると、華族52件のうち37件は長谷・由比ヶ浜・材木座など海岸寄りのエリアに集中し、扇ヶ谷・大町など内陸部は11件に留まっている¹⁵⁾。一方で、海軍関係者の別荘は70件中60件が小町・扇ヶ谷など内陸部に分布している。一般的に避暑・避寒のための保養所として建てられた華族の別荘が、海岸へのアクセスあるいは眺望を得るために海岸寄りに多く見られることは想像に難くない。一方で海軍関係者の別荘が実態としては常住の住居であったとすると、日常生活、特に横須賀線の利用を考慮して駅に近い小町あるいは扇ヶ谷が立地として好まれたのも理解できるし、むしろ海からの潮風を避けるために海浜部は避けられたと考えることもできる¹⁶⁾。







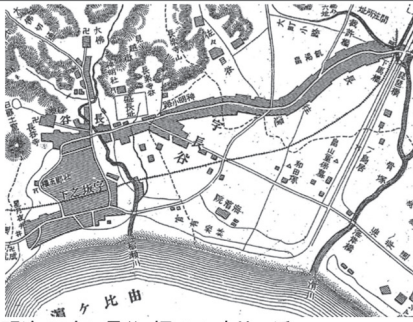


5. 明治期鎌倉の市街地形成

明治半ば以降に政財界有力者および富裕層によって鎌倉に多くの別荘が建設され、明治末にはそれが人口のかなりの部分を占めていたこと、別荘とは呼ばれたものの常住のものも多く、ある程度の分布傾向があることを見てきた。次に、明治期に鎌倉の市街地がどのように形成されていったかを明治15年・24年・36年・42年に発行された実測地図を基に考察する¹⁷⁾。ここでは、別荘が多く分布したエリアとして海岸寄りの長谷・坂ノ下・由比ヶ浜、若宮大路に沿った雪ノ下・小町・大町、北部の典型的な谷戸地形である扇ヶ谷について比較を行った(表3)。

■長谷・坂ノ下・由比ヶ浜

明治15年の地図を見ると長谷・坂ノ下にはすでに長谷寺を中心とした集落が見られる。この辺りは稲瀬川の流域にあり、鶴岡八幡宮から由比ヶ浜・材木座にかけての滑川沿いに広がる平野部とは水系が異なる。由比ヶ浜付近を見ると海岸と内陸部の田畑の間には砂丘と防風林が広がり、住居らしきものは

表3 鎌倉市街地の形成過程

 <p>明治 15 年 長谷・坂ノ下・由比ヶ浜</p>	 <p>明治 15 年 雪ノ下・小町・大町</p>	 <p>明治 15 年 扇ヶ谷</p>
 <p>明治 24 年 長谷・坂ノ下・由比ヶ浜</p>	 <p>明治 24 年 雪ノ下・小町・大町</p>	 <p>明治 24 年 扇ヶ谷</p>
 <p>明治 36 年 長谷・坂ノ下・由比ヶ浜</p>	 <p>明治 36 年 雪ノ下・小町・大町</p>	 <p>明治 36 年 扇ヶ谷</p>
 <p>明治 42 年 長谷・坂ノ下・由比ヶ浜</p>	 <p>明治 42 年 雪ノ下・小町・大町</p>	 <p>明治 42 年 扇ヶ谷</p>

見られない。

長谷の島津忠重公爵および坂ノ下の大村純雄伯爵ら華族の別荘が立ち始めるのは明治20年頃のことである¹⁸⁾。横須賀線開通後の明治24年の地図を見ると砂丘防風林付近に幾つかの建物が立ち、「海濱院」の文字を確認することができる。描画法が異なるためか、長谷・坂ノ下の市街地化に大きな変化は見られないが、若宮大路の下馬から長谷へと続く通り（「長谷往還」の記述あり）が他の谷戸への通りが分岐する幹線として強化されていることがわかる。また、滑川を挟んで材木座から由比ヶ浜を経て長谷へと至る海岸通りが整備されている。

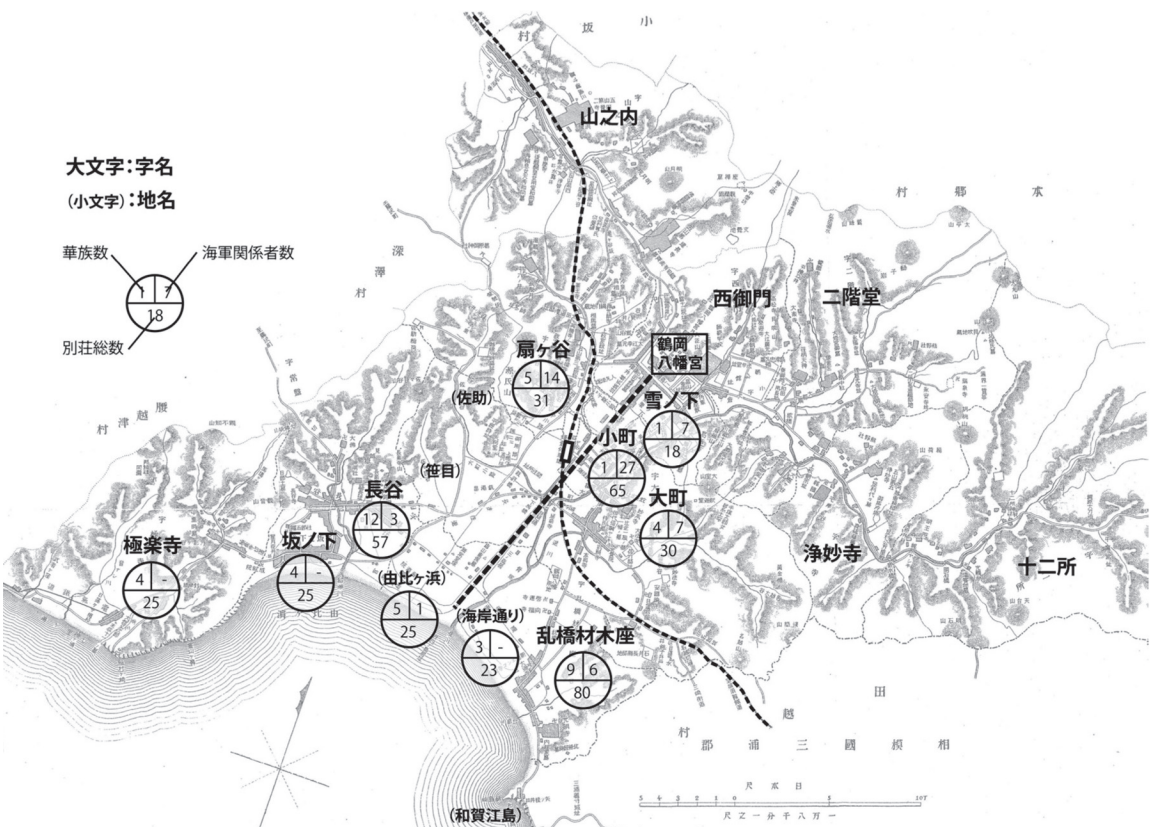
明治36年になると長谷・坂ノ下の市街地が拡大していること、海岸通りに沿って複数の住居が点在していることがわかる。また、海岸沿いの防風林の描画がなくなっている。明治42年には下馬から長

谷にかけての長谷往還沿いに連続した市街地が描かれ、鎌倉町の中心部と長谷・坂ノ下が一体化した市街地を形成していることを示している。海岸通り沿いの建物の記載は省略されているが、**図1**にある通り由比ヶ浜・海岸通りには明治末までに50件近い別荘が確認されている。通りの表記は二重線となっており、都市構造における重要性は増していると考えられる。

■雪ノ下・小町・大町

このエリアには明治初期の段階で鶴岡八幡宮の門前町としての雪ノ下、日蓮宗の本山妙本寺を中心とした大町にそれぞれ集落を確認することができる。小町については両村に挟まれているものの集落らしい集落は認められない。

横須賀線の開通に伴い、若宮大路を挟んで大町か



※鎌倉遊覧実測図（明治36年）を元に作製。数値は上位10地域のみ示した。

図1 鎌倉町における別荘分布状況（明治45年）

ら小町にかけての集落の反対側に鎌倉駅が設けられるが、市街地の形成上の大きな変化は認められない。明治36年に至っても大きな変化は認められないが明治42年には若宮大路に沿って雪ノ下からの市街地の伸長が見られ、小町を経て鎌倉駅近くまで達している。小町は海軍関係者の別荘が最も多く建てられた地域であり、明治37年の日露戦争を契機に海軍の増強が図られたことを考えると、横須賀線の開通よりも遅れて市街地化が進んでいることとの関連性が考えられる。

■扇ヶ谷

扇ヶ谷の集落は明治期を通して閑散としており、地図を見比べても大きな市街地の形成は認められない。扇ヶ谷は小町に次いで海軍関係者の別荘が多い地域だが、別荘の総数では決して多い地域ではない。谷本らの研究¹⁹⁾において、海岸からの距離が遠い扇ヶ谷においては困繞感と中距離の見晴らしが確保される谷戸の比較的内部に別荘地が選定されていることが指摘されているが、他の集落に連絡する主要な通りもないため、明治期の間には海軍関係者の別荘の数の割りに市街地が発達しなかったと考えられる。明治・大正期の鎌倉の字ごとの戸数変化(表4)を見ると、扇ヶ谷の戸数は明治後半以降大

幅に増加しているが、他の字と比してその数は多いとは言えない。奥深い谷戸という扇ヶ谷の地形的特質から、住宅地として発展するにはあまりにも平坦地が少なく、海軍関係者を中心に「常住の別荘」の立地として見出されたものの、都市鎌倉における居住核としての重要性は限定的であったと言わざるをえない。

6. むすび

明治期の鎌倉の都市構造の変化を近代別荘の流布という観点から概観すると、以下のようにまとめることができる。

- ・保養と療養を目的とした別荘の建設は、高地避暑地の軽井沢とともに日本住文化の西洋化が鎌倉の地に表出したものと言える。
- ・華族を中心とした別荘の建設が、中世鎌倉期以来都市住民から忌避されていた海浜部に光を当て、海に開けた近代鎌倉の都市構造のイメージを確立した。
- ・海軍関係者を中心に「常住」の別荘も多く建設されたが、海浜部を除いてその多くは既存集落の近傍に建設されており、既存都市構造を大きく変える要因にはなり得ていない。

このような傾向は大正期まで続くが、大正12年の関東大震災は別荘にも甚大な被害を出し、鎌倉の別荘文化も終焉をむかえる。昭和初期からは新たな田園都市思想の影響を受けた新しい郊外住宅地の開発が大船あるいは鎌倉山で行われるが、これについては稿を改めて論ずることとする。

註記

- 1) 石井 進、大三輪龍彦(編)：よみがえる中世3—武士の都鎌倉(1989)
- 2) 河野真知郎：中世都市鎌倉の環境—地形改変と都市化を考える—、神奈川大学21世紀COEプログラム年報『人類文化研究のための非文字資料の体系化4』、27-28(2007)
- 3) 河野真知郎：前掲書、49-50
- 4) 鎌倉市史編纂委員会：鎌倉市史 総説編、540(1979)
- 5) 島本千也：海辺の憩い 湘南別荘物語(2000)
- 6) 実際の落成は明治21年8月21日。
- 7) 毎日新聞、明治21年8月16日。
- 8) 島本千也：鎌倉別荘物語—明治・大正期のり

表4 字別戸数の変化

	19世紀後半	明治19年 12月3日	明治45年 1月1日	大正12年
十二所	42	43	43	40
浄妙寺	40	46	43	40
二階堂	43	47	57	106
西御門	17	19	32	43
雪ノ下	156	163	290	432
扇ヶ谷	47	55	118	192
小町	56	66	251	435
大町	148	171	272	527
由比ヶ浜	—	—	219	662
乱橋材木座	131	227	390	607
長谷	113	128	398	553
坂ノ下	118	127	204	361
極楽寺	69	72	105	185
計	980	1,164	2,422	4,183

※『鎌倉議会史』による

ゾート都市 (1993)

- 9) 鎌倉議会史編纂委員会：鎌倉議会史 記述編 (1969)
 鎌倉町は別荘所有者に対して特別町税の寄付を求めていたため、その戸数を把握していた。
- 10) 大橋良平：現在の鎌倉, 15-17 (1913)
- 11) 島本千也：前掲書 (1993)
- 12) 同資料では別荘所在地の字名・地名表記が不統一なため、集計に際しては資料中の表記が異なっても同一字の地名は同じ字と見做した。
- 13) 海軍関係者数には文武官の他に華族の柴山矢八海軍大将 (大町) と伊地知幸作海軍中将 (長谷) の2名を含む。陸軍関係者の記載は5名。
- 14) 別荘一覧では単に「海軍軍人」あるいは「海軍機関士」などと記されているものが多い。
- 15) その他の4件は西御門と名越に各1件、一の鳥居に2件であった。皇族の4件も、今小路の御用邸以外は長谷 (華頂宮), 由比ヶ浜 (山階宮), 材木座 (伏見宮) と海岸寄りに分布している。
- 16) 海軍関係者で長谷・由比ヶ浜に別荘を所有するもの4名には華族でもある伊地知幸作中将 (長谷) を含むが、階級の上下は傾向としては見られない。
- 17) 「地形図 (明治15年)」, 「鎌倉實測図 (明治24年)」, 「鎌倉遊覧實測図 (明治36年)」, 「鎌倉江嶋遊覧實測図 (明治42年)」をそれぞれ使用した。
- 18) 鎌倉市教育委員会：鎌倉市文化財資料第7集『としよりのはなし』, 120 (1971)
- 19) 谷本あづみ, 久野紀光, 齋藤 潮：鎌倉の谷戸における別荘立地選定の地形的要因, 都市計画論文集 **39**, 133-138 (2004)